

## 博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学		
研究科名	スポーツ科学研究科		
申請者氏名	星野 映		
学位の種類	博士（スポーツ科学）		
論文題目	フランスにおける柔道の伝播と受容に関する歴史学的研究 —1936-1956年における国内外の地域間・諸集団間の相互連関に着目して— The Diffusion of Judo to and within France from 1936 to 1956: Interaction between Global, Local, National and Regional Forces		
論文審査員	主査	早稲田大学教授	リー・トンプソン 学術博士（社会学）（大阪大学）
	副査	早稲田大学教授	志々田 文明 博士（人間科学）（早稲田大学）
	副査	早稲田大学教授	川島 浩平 Ph.D.（ブラウン大学）
	副査	早稲田大学教授	石井 昌幸

本学位申請論文は、いまや世界の柔道大国となったフランスに、いかなる経緯で柔道が伝わり、その後どのような過程を経て今日のフランス柔道の基盤が成立していったのかを、豊富な同時代資料（一次史料）に依拠しながら明らかにした歴史学論文である。

本論文は、序章と終章とに挟まれた6つの章から成る。以下、それぞれについて概略を紹介する。

第1章では、1930年代後半のパリにおける柔道受容の過程が明らかにされている。すでに19世紀末には「柔術」がパリにもたらされていたし、1920年代には日本人柔道家が警察官や学生に指導を行っていた例もあったが、それらはいずれも実質的な定着には至らなかった。

後のフランス柔道に直接つながる流れとなるのは、1930年代後半におけるユダヤ系住民の活動であった。ユダヤ人アスリートたちのスポーツの祭典である「マッカビア大会」で、反ユダヤ主義への対抗策として導入された格闘技の列に柔術が加えられたのである。ユダヤ人青年による「パリ・マッカビースポーツクラブ」でも柔術が盛んに行なわれた。1936年には「ユダヤ柔術クラブ」が設立されるが、そこで指導を行ったのが川石酒造之助であった。反ユダヤ主義に対抗するための秘密結社の様相さえ帯びていたユダヤ柔術クラブにおいて、柔術は余暇活動であると同時に、士気高揚や護身術としての側面も持っていた。そのようななかで川石の指導を受けた一人が、のちにフランス柔道界の中心人物となっていくモシェ・フェルデンクライスであった。人民戦線内閣下において柔術は左派系知識人たちにも受容され、彼らをも巻き込んでフェルデンクライスは、1936年に「フランス柔術クラブ」を立ち上げる。

1937年にフェルデンクライスの求めに応じて川石が考案したのが、「メトード・カワイシ」であった。これは技に用いる身体部位にそって技術を分類し、それに修行段階に合わせ番号を付したものであった。この方法により、フランス人がフランス語で体系的に技術を理解できるようになった。川石はまた、黒帯取得までの級位にも段階ごとに色帯を与えた。

第2章では、第二次大戦期における柔道の確立が論じられる。この時期、川石の作ったシステムと指導法を軸に、彼の教え子やフランス柔術クラブが中心となって、柔道はさらに広がっていくのである。ドイツ占領下パリにおけるフランス柔術クラブは、その会費を高額に設定することで、知的専門職や産業資本家などの富裕層に柔道を普及させることに成功した。このことは戦後のフランス柔道柔術連盟（F F J J）の担い手層の成立につながった。いっぽう、傀儡政権の首都ヴィシーを含む南部では、柔道は警察や国家体育指導員養成所（CNMA）で行われた。

第3章では、戦後、F F J Jの設立によって「パリ柔道」がフランス全土、また植民地をはじめ海外へともたらされる過程が明らかにされる。1948年以降、F F J Jは柔道指導者資格を国家免許にするための働きかけを開始した。F F J Jの「パリ柔道」は南仏や植民地をもその傘下に収め始めるが、そのなかば強権的な手法のなかで、パリと地方とのあいだに摩擦が起きる。

第4章では、地方柔道団体のF F J J批判と、同時期に起こった講道館柔道の流入が、技術や指導をめぐる不一致からフランス柔道界全体を巻き込んだ緊張関係へと昂進していく過程が検討される。たとえば、トゥールーズの「修道館クラブ」は、パリ柔道の基盤だったメトード・カワイシを拒否し、1951年に講道館から指導者を招聘し、講道館式柔道を行った。講道館柔道はF F J J＝パリ柔道への抵抗の象徴として機能することで全国に広まり始めた。いっぽう、F F J Jは講道館柔道を異端視し、メトード・カワイシを遵奉する。パリ対地方の柔道組織上の主導権争いは、講道館柔道の流入によって柔道の技術をめぐる対立という側面をも帯びるようになる。

戦後、柔道の国際化が進むなかで、F F J Jは国際的なイニシアチヴを確立することにも腐心していた。その様子が第5章のテーマである。1948年ロンドン五輪開催にあわせて、イタリア、オーストリア、オランダなどの代表が集い、ヨーロッパ柔道の国際会議（E J U）がイギリス主導で開催された。フランス（F F J J）は、1950年の第三回会議から加盟する。51年にアルゼンチンが加盟したことで、E J Uは国際柔道連盟（I J U）へと改組された。その際、F F J J会長のボネ＝モリは、「柔道の創始者日本」の全柔連会長嘉納履正をI J U会長とするよう主張し、政治的駆け引きの末にこれを認めさせた。F F J Jは、フランス国内の講道館派とは対立しながらも、国際舞台では、そこでの主導権を握るために講道館と接近した。

第6章では、国際舞台と国内とにおけるこの矛盾が、最終的にF F J Jをして国内柔道界の統合へと向かわせる過程が論じられる。前章で見た国際舞台でのフランスのプレゼンス確保の必要と、同時期に進められていた国内における柔道指導者免許の国家資格化をめぐる動向のなか、F F J Jは国内の講道館派諸団体に譲歩し、これと融合する道を模索せざるを得なくなるのである。こうして成立したのが、新団体「フランス柔道および類似競技連盟（F F J D A）」であった。それは「単一にして不可分の」フランス柔道界が成立した瞬間でもあった。

以上が本論文の概要である。本論文は次の諸点において高い価値を有する。すなわち、これまでの柔道史は、嘉納治五郎と彼の講道館はじまる歴史が中心に据えられ、その前史としての「柔術」へと遡及する研究、講道館を中心とした成立史、嘉納門下生たちによる国内外への普及という具合に、どちらかという日本を基点とする単線的な歴史観が軸となってきた。これに対して本論文では、フランスを中心に据えてより多角的にフランス柔道史を再構

成している。つまり、フランスにおける柔道受容にユダヤ系住民が果たした役割、講道館から派遣されたわけではない川石酒造之助が、技を番号で呼ぶ「メトード・カワイシ（川石メソッド）」という独自の柔道教授法を編み出して弟子を獲得した経緯、フランス人自身による柔道の国内普及、ナチス支配時代のヴィシー政権下での組織整備、パリ（川石派）と地方（講道館派）との対立など、歴史の多様なアクターたちによる柔道実践の在り様が歴史的に丹念に掘り起こされている。

そうした作業を通じて、本論文は柔道史研究の枠を超えて、現代のスポーツ史研究一般における問題関心とその研究水準に応えるものとなっている。すなわち、スポーツ伝播の歴史研究として、特定のスポーツが、その起源となった場所から、周辺世界へと単線的に「普及」して行くとする「伝播論モデル」を乗り越え、受容した側の個別性や多様性、受容側内部の相互関係なども視野に入れつつ、それらをその背景にあった時代の個性とともに描き出している点である。

以上のことから、本申請論文は、博士（スポーツ科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

#### 【本博士学位論文に関連する原著論文】

星野映：2018 第二次世界大戦後のフランスにおける柔道をめぐる対立とその展開—国外と国内の相互連関に着目して—。スポーツ史研究，第31号，1-18頁。

なお、この原著論文の内容は学位申請論文の第4章、第5章、第6章の根幹を成している。

以 上